なゆちこ。

黒やま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なゆちこ。

【Ｎコード】
Ｎ６５１８Ｘ

【作者名】
黒やま

【あらすじ】
四人の少女たちを主軸にした物語。

まだ内容未定。

～四人の少女の朝～（前書き）

初連載小説。

まだ内容はこれといって決まってませんが、

いろいろぶっこんでみたいなとは思っています。

～四人の少女の朝～

ピピピピピッ　ピピピピピッ

規則正しい目覚まし時計のアラーム音が鳴った。

カチッ

時計のアラームを消して、すっとベッドから身を起こし、

カーテンを開け朝日を体中に浴びて一回伸びをする。

「今日もいい天気。」

目を細めながら少女はいった。

杜崎（もりさき）　菜穂子（なほこ）だった。

着慣れた制服に着替え、

肩にかからない程度に切り揃えられた真っ直ぐな黒髪を

丁寧に櫛で梳かして朝食を摂りに階下に向かう。

朝食をすませて一服すると、

いつもと同じく余裕をもって家を出た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

ピッーーーー、ピッーーーーー

携帯電話のアラーム音が部屋中に鳴り響いていた。

「ん〜〜。もう少し・・・むにゃむにゃ。」

鷹野(たかの)　琴子(ことこ)は未だ夢の中のようだ。

起きる気配はまったくみられない。

彼女が起きるのはこれから一時間後のことだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

気づくと、そこは見覚えのない廃墟であった。

「あれ〜？　またやっちゃたのかな・・・。」

三木（みき）　千世子（ちよこ）は枕ひとつ抱いて

寝てる間に移動してしまったのだった。

「戻れるかな～。まっ、歩いてればそのうち辿りつくか。」

と、とりあえず外につながる出口に向かって

とぼとぼと歩いていくのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

永山（ながやま）　侑子（ゆうこ）は朝から道場で稽古をしていた。

・・・が、

グゥ～～～～～～～～～

「腹減った・・。」

シャワーを浴びて、朝から米三合を平らげた。

なんという食欲なのだ。

「うーん。食った、食った。あっ、ちょうど学校行く時間じゃん。さっすがあたしの腹時計！ちゃんと計算してんじゃん。」

そして手早く制服に着替えると

勢いよく扉を開け学校へと向かっていくのであった。

第一話　Ｆ４（前書き）

なんか書いていくうちにとりあえず一通り人物を紹介していくだけになった気がする・・・。次の話へと橋渡しがあんなんでいいのか。

第一話　Ｆ４

教室は朝からにぎやかだった。

朝は常に余裕をもって学校に登校してくる菜穂子（なほこ）は

一時間目の授業の用意をしていた。

「ぐっもーにんっ！！」

元気よく教室の扉をくぐり抜けてきたのは侑子（ゆうこ）。

腰まで届く長く真っ直ぐな黒髪をひとつに結っている。

切れ長な目、くっきり整った眉といった顔立ちに長身のナイスバディ。

「おはよう。今日も朝稽古？」

侑子は菜穂子の左隣の席に腰を下ろす。

「そう！やっぱり朝から体動かすと心が落ち着くんだよね。」

彼女の家は歴史ある剣道道場を営んでおり、幼い頃から剣道を習っている。

「ちょこは？まだ来てない？」

侑子が尋ねたその時、また扉が開いた。

「ぐーてんもるげん。」

と金髪の美少女登場、というか千世子(ちょこ)。愛称『ちょこ』

「何でドイツ語・・・。」

と軽くツッコミを入れる菜穂子。

色素の薄いサラサラヘアーをなびかせ、

眠いのか長いまつ毛を伏せ琥珀色の瞳に影を落としている。

「ちょこ。今日はどこにいたんだ?」

「今日はねぇ〜、廃ビルだった。」

あはは、と笑う千世子。

「相変わらずね。ちょこは。」

何も知らないで聞くと不思議な会話だが

千世子には寝てる間に徘徊してしまう癖がある。

それも重度な徘徊癖で家の外へ出てしまい

気づくと知らない場所に辿りついてるのだ。

しかし当の本人は全く意に介さない様子なので

彼女らどころか家族でさえも心配しない。

キーーンコーーン　カーーンコーーン

そうこうしている間に予鈴が鳴る。

数十秒後、

ダダダダダダッと廊下に響く足音。

ガラガラッッ

勢いよく扉が開いて最後の生徒が入ってくる。

「おはよう！！今日はぎりぎり、ギリギリじゃなかったよ！」

いつもは本鈴とともに教室に入ってくる彼女は嬉しそうに言った。

「琴子（ことこ）。予鈴が鳴った後だから遅刻ギリギリに変わりはないんじゃないかしら。」

ツーサイドアップにまとめた黒髪がパタパタと揺れている。

くりっとしたつぶらで大きな瞳。

髪と同じ漆黒の瞳に見つめられると誰もが吸い寄せられてしまう。
それとは対照的に肌は真珠のように真っ白くまるで日本人形である。
なのだが・・・・・

ズタッ！！

琴子は一歩足を踏み出した途端、何もないところですっ転んだ。
「いったぁ～い・・・」
中身は天然ドジッ子。
「もう、琴子ったら。」
菜穂子はクスリと笑う。
そんな四人に侑子の前の席の背の低い少女が声をかけてきた。
「やっとＦ４のお揃いね。」
彼女の名前は五辻（いつつじ）　涼子（すずこ）といい、このクラスの学級委員長を務めている。
くるくる巻いた髪をサイドでひとつに束ねていて、

愛らしい容姿なのだがあまりにも負けん気が強いため近づいてくる男はいない。

涼子が言っていたＦ４というのは菜穂子ら四人の総称である。

この四人は名物高校生で、ここら一帯では名前を知らないものはいない程有名人なのだ。

約一年前、彼女たちの入学には衝撃が走ったという。

Ｆ４の由来は藤ヶ峰高校の『Ｆ』とＦＬＯＷＥＲ＝花で

花盛りの少女という意味で名づけられたのであり決して某有名漫画のパクリではない。

また彼女らにはその由来からそれぞれ別称がつけられ

侑子は『牡丹の君』　千世子は『白百合の君』　琴子は『芍薬の君』

菜穂子は『藤の君』

そんな彼女たちのことを今はまだ知らない。

これから四人のほのぼのはちゃめちゃ高校生活が明かされていくことになるだろう・・・

第一話　Ｆ４（後書き）

恥ずかしや、、、

第二話　クッキーはプレーンが一番（前書き）

サブタイトルあまり関係ありません。

第二話　クッキーはプレーンが一番

季節は風薫る五月、五月晴れの空に鯉のぼりが元気よく泳いでいる。

「というか前回の私の出番少なくない！？」

「いきなりそんな台詞から入らなくても・・・」

初っ端から五辻涼子（いつつじすずこ）が菜穂子（なほこ）に喰いつく。

「しょうがないじゃん～。五辻は脇役なんだから。」

千世子（ちよこ）は平気で酷いことをサラッと言ってしまう。

「はぁ！？三木何それどういうこと！」

「ちっ違うよ。すずちゃんは脇役より・・・えっとヒラって感じだよ。」

「ヒラって琴子（ことこ）それフォローになってないだろ。」

琴子の天然ボケに侑子（ゆうこ）がツッコむ。

「それよりも五辻さん、さっき伊東（いとう）先生が呼んでいたわよ。行かなくていいの？」

伊東というのは彼女らの担任教師である。
彼女の扱い方が上手い菜穂子のおかげで涼子はしぶしぶ伊東のもとへ行った。
「ふぅー、これで落ち着いてごはんが食べれるね。」
只今昼休み中、屋上で昼食の途中である。
今日のように天気のいい日は毎回四人で屋上ランチがお決まりなのだ。
「あれぇ？侑子、何食べてるの？」
千世子が侑子が持っている手作りクッキーらしいものを指さす。
「ん？あっこれはさっき後輩からもらったんだ。」
「相変わらずモテモテですねぇ～。このこの。」
千世子が侑子を肘でつつく。
侑子はそのルックスと姉御肌という気質で特に後輩からは大人気。
女子の後輩からは憧れを下級生の男子からは尊敬の念を抱かれている。
「だって侑子ちゃんかっこいいもん。この前なんてひったくり犯をグワッと。」

琴子がジェスチャーで背負い投げの真似をしてみせた。

侑子の家は剣道道場を営んでおり彼女は永山一刀流（ながやまいっとうりゅう）の跡継ぎである。

そのため幼い頃から剣の修行を重ねてきている。

彼女が凄いのは剣術だけでなく柔道・弓道もこなすいわば武道の達人なのだ。

「あたしはただ偶々その場にいただけだから。」

侑子は豪快に笑う。

「本当侑子ちゃんって後輩にモテるけど好きな男の子とかいないの？」

何気ない琴子の質問に侑子の手が止まる。

「・・・・・いない、そんなの。」

「ちょっと～今の間は何ぃ？」

こういう話には疎い侑子だが今日は何か違った。

「何かあったの？」

菜穂子の優しい問いかけに侑子が切り出す。

「実は・・・」

「「「「えーーーーー！！！」」」」

第二話　クッキーはプレーンが一番（後書き）

何とまぁ微妙な終わらせ方。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6518x/

なゆちこ。

2011年11月5日03時02分発行